

2019年10月21日から11月2日まで、パリ第七大学ドニ・ディドロ教授カトリーヌ・コキオ氏を招聘し、シンポジウムと特別講演会をおこなった。コキオ氏はジェノサイドの研究に長年たずさわってきた著名な比較文学者であり、生存者の証言と文学の関係をめぐる多数の論文や著作があるほか、現代における様々なカタストロフにおける証言の政治的・文学的可能性を問いつづけている国際的な研究者である。

10月27日(日)に和泉キャンパス図書館ホールでおこなわれたシンポジウム『証言と文学』では、根本美作子(本学文学部教授)の司会と通訳のもと、カトリーヌ・コキオ、ドイツ文学の山本浩司(早稲田大学文学部教授)、フランス文学の谷口亜沙子の三名のパネリストによる口頭発表が行われた。カトリーヌ・コキオは「非人間的なるものの言語と神話の言葉」というタイトルで、証言が過度に「神聖化」される傾向を批判すると同時に、証言行為の根底にある根源的な聖性と祭礼性へと立ち戻る必要について述べた。山本浩司は「第二世代の証言文学——ノーベル賞作家ヘルタ・ミュラーの収容所小説を手掛かりに」というタイトルで、直接に第二次世界大戦を生きていない後継世代に何ができるのかという火急の問いを論じ、証言にもとづく虚構作品として、ヘルタ・ミュラーの『息のブランコ』を挙げながら、証言の神聖性を汚すことを恐れない可能性とその必要性について語った。谷口亜沙子は「証言の証人たち——シャルロット・デルボ、スヴェトラナ・アレクシエヴィッチ、石牟礼道子」と題された発表で、「聞き書き」とも呼ばれる三人の書き手の作品におけるきわだった口語性の役割や、文学の根底にある追悼という身振りの可能性について語った。会場からの質疑応答では、子供の証言における視覚以外の情報の重要性についてや、ジェノサイドのような問題を扱う作品において「キツチュ」は許されるのか、——歴史否定主義者の影響が日に日に深刻なものとなり、戦争の記憶が薄れてゆくなか、たとえ「駄作」と呼ばれうるような作品であっても、何も知らない世代への「入門」の効用があると前向きに認めるべきなのか——等の問いについて、活発な意見が交わされた。

10月31日(木)に駿河台キャンパスリバティータワー12階1124教室で行われた講演「証言＝ルポルタージュの一人称〈私〉ルワンダとシリアの事例から——新たな政治的エクリチュールへ」(通訳・司会:根本美作子が)では、文学作品のみならず、映像・動画作品、インターネットによるジャーナル、人権活動家や複数の作家による共同的な試み、各国の翻訳や出版事情等、きわめて多様な作品をさまざまな視点から概観した上で、虐殺や内戦や原発事故のような、人間を脱人間化する極端な出来事が起こった際、いかにして〈私〉が民主的な抵抗のエクリチュールの主体となって立ち上がってくるのかが語られた。受けた傷からの立ち直りにおいて、「書く」という行為は、読み手となる他者を想定することによって、世界を再び信頼するための契機となりうる。質疑応答においては、そのような「個」の確立において、圧倒的な悲劇の体験を経ることがどうしても必要なのかどうかという質問がなされ、さらに踏み込んだ意見が述べられた。